

国友一貫齋『気砲記』の佐藤信淵自筆書き入れ本

松田 清

はじめに

鉄砲鍛冶国友一貫齋（一七七八～一八四〇）がオランダ製空気銃「風砲」をもとに製造した高性能空気銃「気砲」を絵入りで解説した『気砲記』（一八一九刊）に、国学者平田篤胤（一七七六～一八四三）の門人で、経世家の佐藤信淵（一七六九～一八五〇）が長文の書き入れを加え、秋田の知人に贈った版本が八七年ぶりにみつかった。「風砲」は空気銃のオランダ語 windtoer（ウイントルール）の意訳であるが、一貫齋は自作の高性能空気銃を、「気」を込める砲（ひょう）という意味で、「気砲」と名付けた。

秋田藩重臣あてと推定される書き入れは、「気砲」の開発に協力した蘭学者山田大円（一七六五～一八三二）と佐藤信淵の交流、その構造や性能、平田篤胤が幽界を知ろうと夢中

になった天狗小僧寅吉と一貫齋とのやりとり、幽界の「風砲」や種々の「笛」（オルゴール）の話などからなる。篤胤の記録『仙境異聞』に比べると、多分に誇張を加えているが、当時の平田篤胤サロンにおける未知の世界（幽界）と新しい技術に対する旺盛な知的好奇心を伝える貴重な史料である。

本稿では、まず、一貫齋の「気砲」製造の経緯と仙童寅吉との出逢い、『仙境異聞』にみえる「仙砲」について、これまでの知見をまとめ、ついで、新出の『気砲記』佐藤信淵自筆書き入れ本の書誌的考察と書き入れの内容分析を行なう。

1 一貫齋の「気砲」と仙童寅吉

江州国友村の国友藤兵衛一貫齋（諱重恭、別号眠龍、能^ま）は江戸時代後期に、その優れた職人技と忍耐強い観察実

験精神によって、反射望遠鏡や神境（魔境）、空気銃を製造した鉄砲鍛冶として知られている。一貫斎の成功の陰には山田大円という眼科医の協力があつた。大円は謎の多い人物であるが、オランダ渡りの機器（望遠鏡・空気ポンプ・オルゴール時計など）に詳しく、その蘭学知識で一貫斎を助けた。

一貫斎の生きた日本は飢饉（内憂）とロシアの脅威（外患）におびえる社会不安の時代だった。為政者（幕府・諸藩）は儒学の普及徹底で社会的安定を維持しようとしたが、在野ではその不安のなか、とくに日本の文化的自立を求める国学が勃興した。本居宣長（一七三〇〜一八〇一）の門人を自称した平田篤胤は日本神話や世界の起源、あの世（幽界）を探求し、門人を増やしていった。一方、篤胤の門人で経世家の佐藤信淵は富国強兵策を続々と論じ、諸藩に献策をしたが、机上の空論家としてほとんど無視された。

文化一三年（一八一六）五月、一貫斎は彦根藩からの鉄砲受注をめぐる鉄砲鍛冶年寄との訴訟のため、江戸に呼び出され、文政五年（一八二二）七月まで四年間、江戸に滞在することになった。江戸滞在中の文政元年（一八一八）一〇月、山田大円宅において、オランダ人が献上した將軍家伝来という將軍家御用品の空気銃（「献上風砲」と呼ばれた）を見せられ、その修復と複製を依頼された。それが終わるや、丹

後峰山藩主・老中・京極周防守高備（たかま）の依頼により、一月から高性能の空気銃「気砲」の製造に着手、文政二年三月九日に完成させた。「気砲」のモデルとなった「献上風砲」は一八世紀後半にオランダで製造されたスハイフェル（Schäffel）銃だった^③。スハイフェルはオランダのノールト・ブラバント州グラーフエ（Graaf）の鉄砲鍛冶の名である。

実は、一貫斎は江戸に出る以前から、すでに「風砲」の試作に取り組んでいた。すなわち、文化十一年（一八一四）に、当時膳所藩に仕えていた眼科医山田大円から、オランダ人伝授の風砲製造法を習い、翌年には大坂城代・越前勝山藩主小笠原相模守から注文を受けるほどであった。

文政二年（一八一九）、「気砲」製造の噂はたちまち幕府の老中や好事の大名達の間で評判となった。質問に大勢の人が門前に押し寄せ、対応に困ったため、一貫斎はみずから気砲を「図示し四方好事人の求めに応」じて、解説書「気砲記」を出版することにしたという（『気砲記』自序）。この年、一貫斎は老中酒井若狭守邸（五月二十四日）、松平能登守邸（翌日）、老中松平定信の上覧（九月四日）と次々に、幕府高官の前で「気砲」の実演を行い、その威力を見せつけた。

翌文政三年には松平定信に「気砲」を献上した^④。「気砲」製造が機縁となり、同年一〇月二日、一貫斎は山田大円の紹介で篤胤に入門した^⑤。この日、篤胤は佐藤信淵と一貫斎を

連れて、パトロンで考証学者の屋代弘賢宅へ出掛けた。筑波山中の岩間山の天狗のもとで修行したという一四歳（一五歳とも）の少年寅吉から、あの世（幽界）の話を聴くためだった。寅吉はこの日、屋代弘賢を紹介人として篤胤の門人となった。⁶当時、篤胤は古代学（篤胤は古学または古道学を唱えた）から幽界（死後の世界）の研究に移り、没頭していた。

2 『仙境異聞』にみえる「仙炮」

篤胤が寅吉からの聞書をまとめた『仙境異聞』⁷（文政五年成立）は、文政三年一〇月一日、篤胤が幽界に鉄砲はあるか、と尋ねたときの模様を伝える。寅吉が、

風をこめて打つ鉄砲もありと云ひ出でたるに、我も人も此の頃国友子が風炮にいたく驚きをるに、此を聞きて更に驚きて顔見合せける中にも、国友能当は殊に甚く驚きぬ。これ己れと共に仙炮の事を問へる始めなり。（二八・二九頁）

また、一貫斎はこの日に「仙炮」について十分に聞いただけなかつたので、同年十一月五日に「自作の風炮を持ち来た

りて、寅吉にその仕掛を見せて、神炮のことを探ぬるに、相発して悟り得る事甚だ多し」（四九頁）という。さらに、『仙境異聞』には年月日不明ながら、寅吉が質問に答えて「仙炮」の構造、用法、性能を説明した問答がみえる。

問ふて云はく、鉄炮はなきか。

寅吉云はく、鉄炮もあり。然れど火を用ひざる鉄炮にて、百匁の鉄玉を三里うち放つ鉄炮なり。音はさしも高からず。

問ふて云はく、其の鉄炮の製作は知りたるか。

寅吉云はく、形製作は、〔闕〕図の如くにて、ねぢを廻し、こめて打出す鉄炮なり。風囊に三百匁の風こもるなり。其の風を一度に出すときは、大木を折り、山をもつらぬく故に、袋に風をつもり出すし有りて、遠くも近くも、心当りを定めて打出すなり。玉に書状を付けて、岩間山より筑波の山人に贈りたる事もあり。岩間より筑波山まで、直径二里足らずも有るべし。此の製作を委しく知れる由は、或時師の居ざる間に、其の製作を知りたく、取りくづして中を窺ひ、砂を吹きこめて見たりしかば、具合を損じて、甚く叱られたる事有ればなり。

（二六八頁）

3 『気砲記』 佐藤信淵自筆書き入れ本

二〇二一年六月二日、京都の古書店にて用事をすませ帰ろうとしたとき、丁度店に戻って来た社長から、最近東京の古書市で入手したものがあ、と呼び止められた。何だろう、と待っていると、社長が店の奥から取り出して来て、眼前に置いたのが、標記の国友一貫齋著『気砲記』佐藤信淵自筆書き入れ本だった。あとで確かめると、三月の古書市に出たものという。

『気砲記』版本は私家版であったため、発行部数が少なく、今では稀覯本である。報告者が最初に手に取ったのは、二〇〇二年正月、平戸の松浦史料博物館に伝わる国友藤兵衛制作の気砲一式を調査したときだった。「風銃」と蓋に墨書した木箱に分解して収納された気砲の付属文書として納められていたのである。⁸⁾

書誌

今回出現した『気砲記』の書誌は次の通りである。

○全体的特徴

木版。1冊。二五・五cm×一八・二cm。帙入り。右袋綴じ。紙縫りで二箇所を結び綴じ。全17丁の構成は、表紙（1

丁）・序（2丁）・本文（12丁）・元の裏表紙（1丁）・裏表紙（1丁）である。本文は無界、每半葉7行。

冊子中央に縦の折り目が残っており、長期間、冊子全体が内側に強く折り畳まれていたことが分かる。

上述の松浦史料博物館所蔵「風銃」付属文書の『気砲記』の綴じ方は、薄緑色の絹帯を用いて二箇所を結び綴じにしており、表紙・裏表紙とも全16丁である。平戸松浦家で購入した当初の姿を留めているものと思われる。

○帙

黒色の布装丁（現代）。帙題簽に「気砲記 佐藤信淵自筆書入」の墨書あり。帙の見返しに、「佐藤信淵自筆書入 気砲記 金二十円」と墨書した「神田区神保町二ノ七 山本書店」の短冊が貼付されている。短冊には「弘文荘」の朱印がおされており、帙題簽の墨書は書誌学者森銑三の自筆である。

○全17丁の構成

表紙 1丁（裏白）

小口近くに、縦に「気砲記 単」と印刷。

序 2丁

版心に「一」「二」の丁付けを印刷。1才冒頭に「気砲記序（蘭名ウインドルウル／俗ニ風砲ト云）」との題あり。（ ）内は割注をしめす。佐藤信淵の書き入

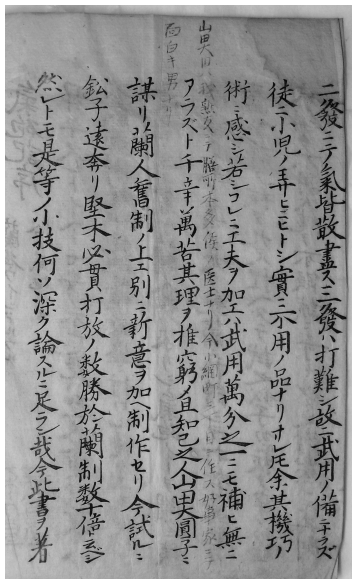


図1 序 書き入れ

- れ①あり(図1参照)。
- 序末に「文政二年春 江州 国友十兵衛能当著 (印: 眠龍) (印: 能當)」とあり。
- 本文 12丁 版心に「一」〜「十二」の丁付けを印刷。
- 「気砲全備之図」(1オ〜4オ) 佐藤信淵の書き入れ
- ②あり(図2a、2b、2c参照)。
- 「銅金器具ノ図4 (付取ハツシノ次第)」(4ウ〜5ウ)
- 「金具取ハツシノ図4 (付シクミノ次第)」(6オウ)
- 「蓄気筒 (気ヲ蓄ハエ置ク器也)」(7オ)
- 「生氣筒ノ図」(7ウ〜8オ)
- 「生氣棍ノ図」(8ウ〜9オ)
- 「生氣ノ法」(9ウ〜10ウ) 佐藤信淵の書き入れ③あり
- 二發ニ氣皆散盡ニ發打難シ故武用備テ文
徒小兒弄ヒトシ實ニ用ノ品リナレ余其機巧
術感シ若シニテ大ヲ加テ武用萬分ニ三補ト無ニ
フフスト千辛萬苦其理ヲ推究窮且知シ山奥園子
謀リ闖人奮制上ニ別ニ新音ヲ加制作セリ今試シ
銃子遠奔リ堅木必貫打放ノ教勝於闖制數倍ニ
然トモ是等ノ小技何ソ深ク論止足ニ哉今此書著

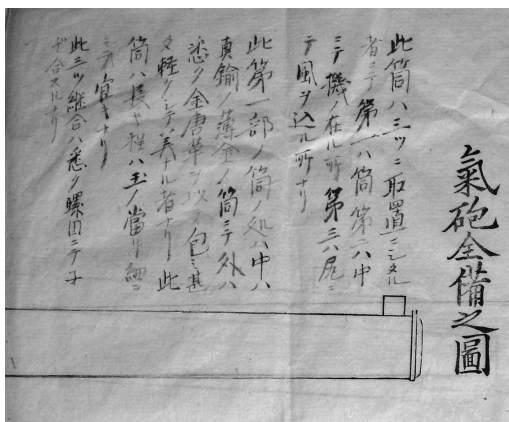


図2a 気砲全備之図 書き入れ

- (図3参照)。
- 「打放スル図」(11オ〜12オ)
- 元の裏表紙 1丁 版心は丁付けなし。佐藤信淵の書き入れ④あり(図4参照)。
- 裏表紙 1丁
- 右に位置のみ示した佐藤信淵自筆書き入れ①〜④の内容は後述する。信淵は時をおかず一気に書き入れている。④の末

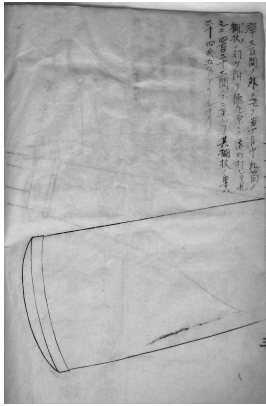


図 2b 気砲全備之図
書き入れ

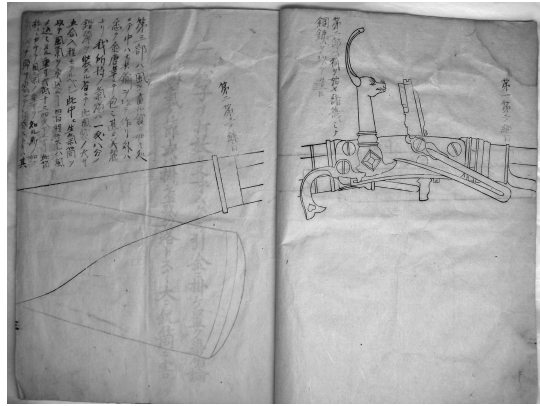


図 2b 気砲全備之図 書き入れ

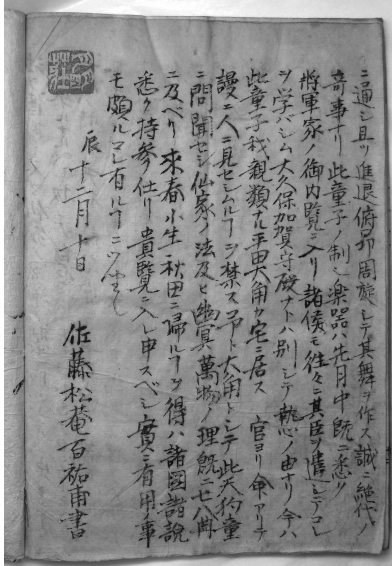


図 4 元の裏表紙 書き入れ (末尾)

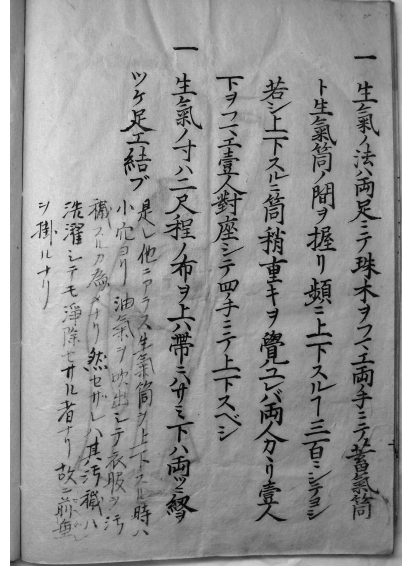


図 3 生氣ノ法 書き入れ

尾に、

来春小生秋田ニ帰ルコトヲ得バ、諸図諸説悉ク持参仕
リ、貴覽ニ入レ申スベシ。実ニ有用ノ事モ頗ルマレアル
コトニ御座候。

辰十二月十日 佐藤松菴桃祐甫書

とあり、文政三年二月一〇日（一八二一年一月一三日）付
けで秋田の知人に贈られたものと分かる。

○蔵書印

「稲太郎蔵書」（朱文方印）（[図5](#)参照）

序1オの右余曰の下部に捺されている。印主は『佐藤信
淵』（戦争文化叢書第三五輯、日本問題研究所発行、世界創
造社発売、一九四一年七月刊）の著者坂本稲太郎と推定され
る。坂本稲太郎は国民精神文化研究所教育科（教育学・教育
史）所属臨時嘱託（一九三八〜一九三九）、同助手（一九四
〇〜一九四三）を勤め、同研究所の後身、教学錬成所錬成官
補⁹、『日本教育史学会紀要』第1巻（一九四五年二月一五日
刊）の紀要編纂委員の一人に名が見える¹⁰。

信淵の教育思想を論じた坂本の『佐藤信淵』は、「戦争と
文化とを一体とする戦争文化原理」（二頁）を謳う「戦争文
化叢書」の一冊であるにもかかわらず、軍事知識に乏しく、
信淵がモリソン号事件の際に著した『夢々物語』を引いて
「海岸のボン〜」（砲声——筆者註）より内々のボン〜の

恐ろしきことは、逆も言語に尽されぬ」（六〇頁）と筆者
註を加えているが、誤りである。「ボン〜」はオランダ語
「ボンベン」（bomben）の訛りで、艦砲の破裂弾を意味する。
引用文は外国船による艦砲射撃の破裂弾（ボンベン）より国
内の破裂弾ともいふべき飢饉の方が恐ろしいことはとても言
葉で尽くせない、という意味である。

また、結論は、信淵の「一切の所説は——よしその間に
は地政学的な判断の上からは皇国の将来の発展に就いて予見
とも見らるべきものがあつたにせよ——歴史の実際の歩み
からすれば、一の空しい机上計画の夢に終わつてゐる」（八
九頁）が、「その夢の希求に対して如何にもぐるはしい熱
情が寄せられたか」（九一頁）と、精神論的な信淵賛美で終
わっている。

「月明荘」（白文方印）（[図6](#)参照）

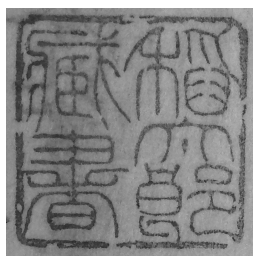


図5 「稲太郎蔵書」印

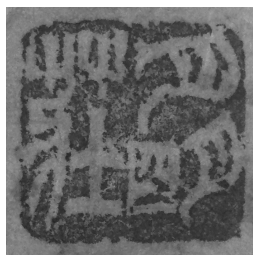


図6 「月明荘」印

本文12ウの上部余白にあり。古書肆弘文荘主人、反町茂雄の蔵書印であろう。ただし、これまで知られている同一字体の「月明荘」は朱文方印。蔵書印データベースの印影画像をみると、反町茂雄の蔵書印「月明荘」はすべて陽印（朱文方印）であり、白文の「月明荘」印はない。

○裏表紙の特徴

裏表紙の中央やや下に「葦蔭居士所蔵」と旧蔵者の墨書がある（図7参照）。この「葦蔭居士」がいかなる人物かは未詳である。

ただし、裏表紙は、方眼を施した和紙1枚と「年中文之詞」および「十二月異名」を記した写本1枚を重ね、裏表を逆に袋綴じにしたものである。

綴じ込まれた袋の中を判読すると、方眼紙には、「御行列諸道具持諸士」「諸士御歩行口」「御用人夕御小姓迄御行列御側図」「御龕之力者」「諷経」「佐竹山城供侍」などの文字を書き入れた配置図が書かれており、佐竹家の葬儀行列配置図と思われる。図8は方眼紙の袋を解本して撮影した部分図である。「御龕」は遺体を納める宮型の輿であり、「力者」（力持ちの従者）が担ぐ。「諷経」は読経の意である。

「年中文之詞」は書簡用の雅言例句を、正月から十二月まで月ごとに列挙している。たとえば、「正月 余る寒さ△梅やら香を送る△鶯の長めに鳴立△霞うらゝがに」といった具

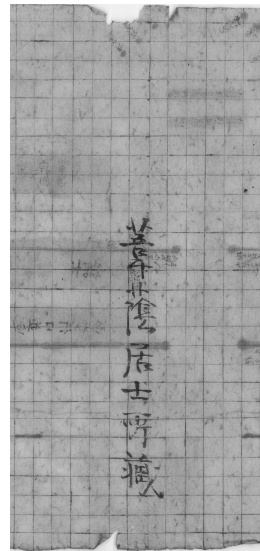


図7 裏表紙墨書
「葦蔭居士所蔵」

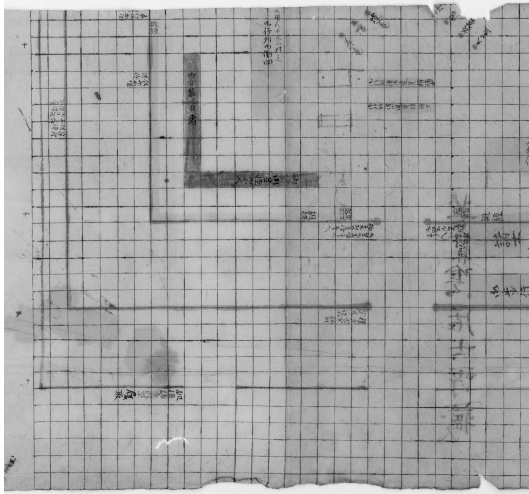


図8 裏表紙の方眼紙袋（解本、部分図）

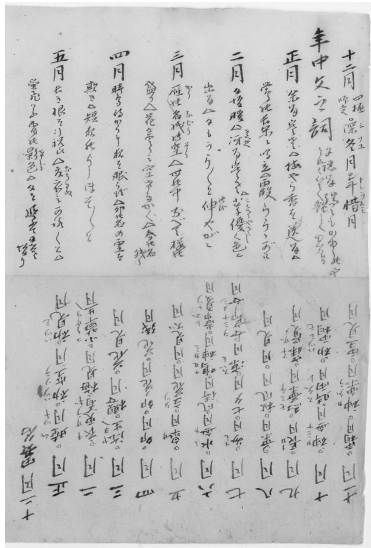


図9 裏表紙の袋「年中文之詞」「十二月異名」(解本、部分図)

合である。「十二月異名」は正月から十二月まで、「正月」^{ムツキ}○「初空月」^{ウツラ}○「初見月」^{はつみ}「二月」○「衣更着」^{キサラギ}○「梅見月」^{ウメミ}○「小草生月」^{コクサヲ}のように、各月の異名を列挙している。図9はこれを解本して撮影した部分図である。

以上の特徴から、旧蔵者の「葦蔭居士」は佐竹藩士、しかもかなり高位の家臣ではないかと推察される。

信淵が書簡を送った秋田藩重臣としては、家老の正田斎が知られている。信淵は正田に文化九年(一八一二)一二月二八日付け書状、および同月二六日付け謹書を送り、大船を建造し、東海航路を開き、秋田産の米穀と鉱産物を江戸に廻漕するよう、激烈な言辞で藩政改革を迫った。「秋田を一新せ

ず、則避賢路て可なり。碌々として坐ながら国家を衰微せしむべけんや」(奉呈松塘正田斎君封事¹¹)。その後の二人の關係は未詳である。

4 森銃三の紹介記事

佐藤信淵書き入れ本の帙題簽に「気砲記 佐藤信淵自筆書入」と墨書した書誌学者森銃三(一八九五〜一九八五)に『佐藤信淵——疑問の人物』(今日の問題社、昭和一七年一〇月一五日程)がある。今日では『森銃三著作集』第九卷(中央公論社、昭和四六年刊)に「佐藤信淵」と改題して収録されている。

森銃三は大東亜共栄圏が叫ばれていた大戦中に本書を刊行した。実証主義的な伝記研究の立場から、明治・大正・昭和前期までの佐藤信淵顕彰・崇拜熱に鉄槌を下すためであった。批判の対象となったのは、江戸時代の農書の収集と研究に生涯をかけ、『農政本論』(明治4年)から『佐藤信淵家学大要』(明治三九年)におよぶ一連の信淵著作を刊行した内務官僚織田完之(一八四二〜一九二三)による農学者佐藤信淵の顕彰活動、また、大正末期・昭和初期の滝本誠一編『佐藤信淵家学全集』(岩波書店、一九二五〜一九二七)にもとづく経済学者佐藤信淵の顕彰・崇拜熱、さらには信淵の崇敬

者鴉田恵吉えきちによる無批判的な伝記研究で、刊行当時文部省の推薦図書となった『佐藤信淵』（昭和一五年一月自序、大觀堂、昭和一六年五月一二日刊）であった。

森銃三は、「徒らに美化し、偶像化し、理想化した、似ても似つかぬ信淵をこね上げて、これが信淵だ、これを信ぜよと強要せらるゝことは、私に於ては迷惑千万である。私はありのまゝ、の信淵を見むことを欲する。（中略）虚偽をあくまで排する。然も私の眼に映ずる信淵その人には、全生涯に互つて虚偽の陰のあまりにも濃厚に纏はり付いている事実を否定すべくもない」「信淵の如き欺瞞に充ちた偽人物を排斥せねばならぬ」（昭和一七年九月一日付け、序文）と宣言し、佐藤信淵の著作の序跋類や書簡にあらわれた自伝的文章の相互矛盾を、関連史料も援用しながら、徹底的に暴露している。

森銃三はこの偶像破壊的批判書の第二章「信淵伝の研究」の「二十六」節、「二十八」節（『森銃三著作集』第九卷七九〜八八頁）において、今回出現した『気砲記』佐藤信淵自筆書き入れ本を初めて紹介し、書き入れの全文をコメントを加えながら翻刻している。

この第二章は第九卷の編集後記によれば、雑誌『奉公』昭和九年三月号から一年余り連載された「佐藤信淵伝の研究」が初出という。初出の掲載誌の発行年月日は未確認である

が、森はこの紹介記事のなかで、佐藤信淵の書き入れを「所蔵者石田直太郎氏の好意に依つて、こゝに発表することの出来るのを欣快とせざるを得ない」と記している。森は石田直太郎との関係をこれ以上語らないので、記事からは石田の素性、書き入れ本の入手経緯が分からない。石田は元旧制秋田中学の漢文・作文・習字の教師であり、当時秋田では音楽家・郷土史家・蔵書家として知られていた。¹³

前掲の鴉田恵吉著『佐藤信淵』巻末に付された「佐藤信淵年譜」の文政三年欄に、「〇十二月十日 国友能当の『気砲記』の裏表紙に附記して秋田の友人に贈る」とある。典拠は森銃三の雑誌『奉公』記事か。本文にこの件に関する論述はない。

森銃三の紹介記事に、蔵書印に関する記述がないのは、雑誌『奉公』に記事を發表した時（昭和一〇年か）、石田直太郎旧蔵本には、蔵書印がなかったためであろう。その後、弘文荘の在庫となり（『月明荘』印あり）、森銃三が題簽を書き入れたあと、「稲太郎蔵書」（坂本稲太郎所蔵）となったと推定される。

さて、報告者は森銃三の実証主義的な批判にもとづく佐藤信淵観に賛同する。森が寅吉の神隠しの問題は科学的に論ずる資格がないので触れない、国友能当および『気砲記』のことは「有馬成甫氏の著『一貫斎国友藤兵衛』」に詳述してある

のに譲つて、こゝにはその方面まで言及せずに置く」とするのは理解できる。書き入れに対する次のコメントも十分説得的である。

信淵は寅吉のことを述べるのにも、すべて自己を中心として筆を運ばせて、寅吉が平田方にゐることまでも後段に至つて始めて明かにし、寅吉の談話も、「予と大角として」筆記したやうにいつてゐるが、その辺も主客が顛倒してゐる。なほ信淵は篤胤を「我親類」といつてゐるが、信淵と篤胤とが姻戚関係にあつたやうな事実はなかつたらしい¹⁵。

敢えて瑕瑾を指摘し、今日の視点から少し不満に思うところを付け加える。

信淵の書き入れのうち、「気砲」の構造を述べた箇所ので、森は「第二部は弧を始め諸機みなみな鋼鉄を以て造る」（傍線は引用者）と誤つて翻刻している（信淵の原文は漢字カナ交じり）。翻刻文中の「弧」は「狐」の誤りである。「狐」はスヘイフェル銃の撃鉄部の動物模様によつて、一貫斎が名付けた撃鉄部の名称である。信淵は正しく「狐」としている。『気砲記』の挿図の撃鉄部にも同じ動物模様が描かれているので、森の誤りは校正ミスかもしれない。

また、信淵が自分所蔵の「気砲」を徳丸原で試射したこと述べた文章「当月中此筒ノ藥杖ニ羽ヲ付テ徳丸原ニテ遠町打シテ見ルニ、四百二十三間余ニ至レリ」を、「当月中此筒の藥杖に羽を付て徳丸原にて遠町打して見るに、四百二十三間余に至れり」と翻刻している。原文の「カルカ」が正しく、「アルカ」は誤りである。これも校正ミスであろうか。「カルカ」は先込め銃の銃口から銃身の奥まで薬と弾丸を装填する棒である。

徳丸原（現在の東京都板橋区高島平付近）は、のち天保二年（一八四一）五月九日に長崎町年寄高島秋帆が幕命により西洋流砲術演練¹⁷を行ったことで有名になったが、森銃三は信淵の言うごとく、文政三年（一八二〇）一〇月中頃に信淵が徳丸原で気砲の試射（遠町打）を行ったことが事実かどうか、についての検証は行っていない。

森銃三は信淵が『気砲記』書入れ本を「秋田の知人に贈つた」とするにとどまり、その知人の正体を追求しなかった。書き入れのある元の裏表紙に綴じ込まれた新しい裏表紙の存在についても、またその書誌的な特徴についても、言及していない。裏表紙に気付いたものの、雑誌連載記事という制約その他の事情のため素通りしたかもしれない。

「寅吉の製作した楽器が將軍の内覧に入つたといふことは『仙境異聞』には見えない」と指摘するが、その楽器につい

ては『仙境異聞』に、山田大円宅で篤胤、寅吉、藤兵衛ら一行が「オルゴオル」を見たと明記してあるにもかかわらず、この「オルゴオル」との関連が指摘されていない。

5 佐藤信淵書き入れの翻刻

問題の『気砲記』の佐藤信淵書き入れを、上記の書誌において区分した①～④の4種に分けて、注記を加えつつ、全文を以下に翻刻する。漢字カナ交じりの原文は少し朱を交えた墨で書かれている。翻刻に当たって、通行の字体に直し、句読点を加え、適宜、段落を設けた。また、読みづらい箇所には平仮名で振り仮名を付した。片仮名の振り仮名は原文のままである。

書き入れ①

山田大円ハ我熟友ニテ膳所ノ本多侯ノ医士ナリ。今小網町三丁目ニ住ス。好事家ニテ面白キ男ナリ。

書き入れ②

此筒ハ三ツニ取置ニシタル者ニテ、第一ハ筒、第二ハ中ニテ機ノ在ル所、第三ハ尻ニテ風ヲ込ル所ナリ。

此第一部ノ筒ノ処ハ中ハ真鍮ノ蓮金ノ筒ニテ、外ハ悉

ク金唐皮ヲ以テ包ミ、甚ダ軽クシテ美ナル者ナリ。此筒ハ長キ程ハ玉ノ当リ細ニシテ宜キナリ。

此三ツヲ継合ハ悉ク螺円ニテ子ザ合スルナリ。

第一第二ノ継目。

第二部ハ狐ヲ始メ諸機ミナ鋼鏡ヲ以テ造ル。

第二第三ノ継目。

第三部ハ風ヲ蓄ル袋ノ如キ処ニテ中ハ真鍮ヲ以テ作り、外ハ悉ク金唐皮ニテ包ミ、甚ダ美麗ナリ。我所持ノ気砲ハ一匁八分ノ鉛彈ヲ装スル者ニテ、此風袋ノ大サ五合入程モアルベシ。此中エ生気筒ヲ以テ風氣ヲ突込ムコト四百程モスレバ、風ノ込ミタル重サ大抵十三四匁アルナリ。此筒秤ニカケテ風氣ノ重サヲ知ル。斯ノ如ク氣ヲ込テ彈ヲ容レテ打發ストキハ、其彈三百間ノ外ニ飛ブ。当十月中此筒ノ藥^カ杖ニ羽ヲ付テ徳丸原ニテ遠町打シテ見ルニ、四百二十三間余ニ至レリ。其藥杖ノ重サハ三十四匁五分アリシナリ。

書き入れ③

是他ニアラズ。生気筒ヲ上下スル時ハ小穴ヨリ油氣ヲ吹出シテ衣服ヲ汚穢スルガ為メナリ。然セザレバ其汚穢ハ洗濯シテモ淨除セザル者ナリ。故ニ前^マ垂ヲ掛ルナリ。

書き入れ④

国友藤兵衛能当ハ江州国友村ノ住人ニテ、代々官ノ鉄炮鍛冶ナリ。此度此風炮ヲ製シ一時其名ヲ振フ。我ト殊ニ入魂ナリ。

然ルニ近來常州岩間山ノ十二天狗ノ宗匠ナル杉山僧正ト称スル大天狗ノ弟子ニ白石平馬ト云フ者アリ。其元ハ江戸池ノ端七軒町ノ駕ゴカキ庄七ト云フ者ノ弟ナリ。此平馬九月中ヨリ親元工帰リ、種々奇妙ノ技芸ヲ得テ江戸一般ノ大評判ナリ。

先ヅ書法ヲ以テ屋代太郎ヲ伏シ、幽冥ノ理ヲ説テ平田篤胤ヲ伏シ、音楽ノ妙ヲ説テ御音人衆ヲ伏シ、鉄炮ノ理ヲ説テ此国友ヲモ伏シ、風炮ナドハ仙家ニ於テハ種々ノ妙機アリテ、此製ノ如キハ甚ダ麤工ニテ取ルニ足ラザルコトノ由ナリ。国友モ天狗界ノ風炮制作ノ妙理ヲ聞テ、大ニ膽ヲ潰シ、此頃ハ右ノ白石平馬ニ從テ其法ヲ伝授シ、又々仙家ノ風炮ノ製ニ取カ、レリ。定テ來春ハ出來ルナルベシ。

扱コノ白石兵馬ト云フハ、本名ハ虎吉ト云ヘリ。七歳ノ時ヨリ天狗ニ誘ハレ、当年十五歳ニテ親元ニ帰レリ。其頑ナルコト可惡ノ童子ナリ。然レドモ其諸物ノ理ヲ發明スルコトハ實ニ聰明伶俐、遙ニ千万人ノ意外ニ出ヅ。奇人ト云ツベシ。彼ガ製シタル笛ニ種々ノ制アリテ、其長一丈ニシテ五十孔アル者アリ。長九尺ニテ五十七孔アル笛アリ。共ニ五人ニテ

吹ク。又一尺五寸ニテ九孔アル者アリ。又フイゴノ如クニテ棒ヲ拔サシシテ鳴ラス笛アリ。又八絃ノ琴ノ如クニテ、其絃ハ真鍮ノ針金ニテ鉄ノ爪ニテ鳴ラス物アリ。又桶ノ中ニ水ヲ蓄ヘ、其上ニ金鉢ヲ伏セテ打鳴ラス者アリ。何レモ其声晴朗ニシテ甚ダ妙ナル美音ヲ作ス。

仙家ニ七聖ノ舞ハ竜ノ舞等、種々ノ舞樂アリ。此十五歳ノ童子ヨク其音律ニ通ジ、且ツ進退俯昂周旋シテ、其舞ヲ作ス。誠ニ絶代ノ奇事ナリ。

此童子ノ制也樂器ハ先月中既ニ悉ク將軍家ノ御内覽ニ入り、諸侯モ往々ニ其臣ヲ遣シテコレヲ学バシム。大久保加賀守ナドハ別シテ熱心ノ由ナリ。

今ハ此童子、我親類ナル平田大角ガ宅ニ居ス。官ヨリ命アリテ謫ニ人ニ見セシムルコトヲ禁ズ。予ト大角トシテ此天狗童ニ問聞セシ仙家ノ法及ビ幽冥万物ノ理、既ニ七八冊ニ及ベリ。來春小生秋田ニ帰ルコトヲ得バ、諸図諸説悉ク持參仕リ、貴覽ニ入レ申スベシ。實ニ有用ノ事モ頗ルマレアルコトニ御座候。

辰十二月十日 佐藤松菴桃祐甫書

5 書き入れ文の考察

以下、便宜上、書き入れ文四種を各種ごとに適宜段落に分

けて、考察を加える。読みやすくするために、『気砲記』の原文（漢字カナ交じり文）も含めて、引用文はすべて漢字平仮名交じり文に直した。読みづらい箇所には平仮名で振り仮名を付した。傍線は翻刻者が加えた。

書き入れ①

山田大円は我熟友にて膳所の本多侯の医士なり。今小網町三丁目に住す。好事家にて面白き男なり。

考察

これは「気砲記序」の左記の文中の「山田大円」に関する書き入れである。

其制二発にて気皆散尽す 三発は打難し 故に武用の備にならず 徒に小児の弄ひにひとし 実に不用の品なり されとも余其機巧の術に感し 若しこれに工夫を加えは 武用万分之一にも補ひ無にあらすと 千辛万苦其理を推窮して 且知己之人山田大円子に謀り 蘭人旧制の上に別に新意を加へ制作せり。今試るに、鉛子遠奔り、堅木かならずつらぬき必貫、打放の数勝らんせいにまさる於蘭制数十倍と云べし。

山田大円は明和二年（一七六五）年、越前福井生まれ。安永六年（一七七七）一六歳で京都に出て、橋南谿に入門。

その後、長崎でオランダ人から西洋医学、眼科学を学び、一家をなして諸国を遍歴。文化初年に膳所侯に仕えた。文化二年一〇月二七日、五一歳で法橋に叙せられ、翌文化十三年（一八一六）藩侯に従って江戸に出た。のち致仕して江戸に留まったという¹⁸。

文化一〇年一〇月再版の『平安人物志』には、「奇工」欄に「山田久重（知恩院町梅本町）、俗称「山田大円」として記載されている。上述のように、文化十一年に一貫斎は大円の指導でオランダ製風砲の構造を研究し、雛形の製作に成功した。文化十三年五月に江戸に出た一貫斎は文政元年（一八一八）一月一〇日付けで親類の次郎吉に書状を送り、大円が膳所藩に仕えていたときの様子と、大円が江戸で開業した医院の繁昌ぶりを伝えている。

大円と申医者は目之療治之事は誠に口者にて御座候、尤脈所え御抱之医者にて候所、当年御当地え罷出候所、日々之病人凡百八十人も有之、先江戸大阪に無之と申事に御座候¹⁹。

この書状にみえる膳所藩の「脈所」は未詳であるが、大円は眼科医ではなく内科医として仕えていたようだ。佐藤信淵は文政三年一二月一〇日付けのこの書き入れで、「膳所ノ本

多侯ノ医士ナリ」と記すだけで、大円の医院繁昌には触れていない。大円の住所「小網町」とは日本橋小網町に他ならない。信淵が大円を「我熟友」というほど、二人が親しい間柄だったとは、篤胤の『仙境異聞』での叙述からはうかがえない。

「我熟友」とは信淵が秋田の知人に向かって自慢げに誇張した表現と思われる。また、若い頃に宇田川槐園（玄瑞）から蘭学を学んだと自称する信淵は、大円を「好事家」とするにしても、大円の蘭学知識に言及してもよいはずである。

書き入れ②

此筒は三つに取置にしたる者にて、第一は筒、第二は中にて機かくりの在る所、第三は尻しりにて風を込る所なり。

此第一部の筒の処は中は真鍮の蓮金の筒にて、外は悉く金唐皮きんたうひを以て包み、甚だ軽くして美なる者なり。此筒は長き程は玉の当り細にして宜きなり。

此三つを継合つぎあは悉く螺円らえんにて子ち合するなり。

第一第二の継目。

第二部は狐を始め諸機つぎみな鋼鍔を以て造る。

第二第三の継目

第三部は風を蓄る袋ふくの如き処にて中は真鍮を以て作り、外は悉く金唐皮にて包み、甚だ美麗なり。我所持の気砲きぱうは

一匁八分の鉛弾を装する者にて、此風袋の大きさ五合入程もあるべし。此中え生気筒を以て風気を突込むこと四百程もすれば、風の込みたる重さ大抵十三四匁あるなり。此筒こ秤にかけて風気の重さを知る。斯の如く気を込て弾を容れて打発うちすときは、其彈三百間の外に飛ぶ。当十月中此筒この槊杖かに羽を付て徳丸原にて遠町打して見るに、四百二十三間余に至れり。其槊杖の重さは三十四匁五分ありしなり。

考察

「筒」 一貫斎のいう「銃筒」（銃身）にあたる。

「機」 機関部をさす。

「蓮金」 蓮根の中空部になぞらえた信淵の造語か。銃身の中を「真鍮」製とし、銃身の外は「金唐皮」（なめし皮製）で包む、というが、一貫斎が文政二年三月九日に完成させた「気砲」第1号の銃身は「鉄、白檀皮包」である。²⁰⁾

「尻」 一貫斎のいう「蓄気筒」（タンク）をさす。

「狐を始め諸機つぎみな鋼鍔を以て造る」「気砲」第1号の機関部は鋼鉄ではなく真鍮製である。「狐」は一貫斎がモデルのスヘイフェル銃の撃鉄部の動物模様を「気砲」に忠実に再現し、「気砲記」で「狐」と呼んだことによる。

「風を蓄る袋」 『気砲記』で「蓄気筒」と呼ぶ空気タンクをさす。信淵は中は「真鍮」で作り、外は「悉く金唐皮にて包み」というが、「気砲」第1号のタンクは現存の一

貫斎作「気砲」から推定して鉄製であり、白檀びやくだんの皮で巻いたものにちがいない。「金唐皮」（なめし革製）ではないはずである。

「我所持の気砲」一貫斎の「気砲」は京極周防守（文政二年三月九日納入）に始まり、加賀前田家（文政二年納入）、松平定信（文政三年秋冬に納入か）、水戸家（文政三年納入）など諸侯から注文を受けて製造納入したもので、当時、農民出身の貧書生であった佐藤信淵はとも購入できなかつたはずである。一貫斎は「気砲」の宣伝と売り込みに懸命であり、信淵のいうように「入魂」の仲であつても、譲渡はしなかつたのではないか。「我所持」は疑わしい。

「秤にかけて風気の重さを知る」松浦史料博物館所蔵の「一貫斎製「風銃」（気砲）付属文書の一貫斎自筆書簡から、一貫斎が文政七年四月に気砲のポンピングに空気重量の計測を取り入れていたこと、しかも計測用の「気量」（きばかり）も製作していたことがわかる。『仙境異聞』⁽²¹⁾では、寅吉が仙境にあるという銃（仙砲）について「ねちを廻し、こめて打出す鉄砲なり。風囊に三百匁の風こもるなり」と説明している。寅吉が一貫斎や山田大円から聞き出した話を繰り返しているにすぎないことは明白である。

「徳丸原にて遠町打」徳丸原は峽田領はげたとよばれた將軍家菩

提寺上野寛永寺の寺領に属し、周辺六カ村が秣場として利用する入会地であつたが、幕府の鷹場や鉄砲稽古場はげたでもあつた。⁽²²⁾『新編武蔵風土記稿』卷之十四豊島郡之六峽田領（文政九年成）「徳丸原」項目に、

荒川二傍はらへり。東西十三丁程南北八丁余、上下赤塚、成増なりぞう、徳丸本村、同脇村、同四ツ葉ノ六村入会ノ持ニテ、東ノ方志村ノ原ニ続ケリ。古ハ一円赤塚地中ノモノナレト、今多ク徳丸ノ地ニ接スルヲ以テ徳丸原ト唱へり。烽火ノ術ヲ学フモノ願上ケコノ原ニテ其業ヲ試ム。（傍線引用者）

とあるように、「願上ケ」ねばならなかつた。したがって、士分でもない信淵が幕府の許可を得て、自分所有の気砲の試射を徳丸原で行うなど、到底不可能であつたはずである。

書き入れ③

是他にあらず。生氣筒を上下する時は小穴より油気を吹出して衣服を汚穢するが為めなり。然せざれば其汚穢は洗濯しても浄除せざる者なり。故に前垂まえしを掛るなり。

考察

「生氣ノ法」（圧搾空気を込める法）の原文の最後の一つ書

き

一 生氣の時は二尺程の布を上は帯にはさみ、下は両つに紐をつけ足え結ぶ

に書き足した追加説明である。この書き入れから、信淵が実際にみずから気砲を試射したか、試射を目撃したことが推定される。

書き入れ④

本文最終丁裏(12ウ)から元の裏表紙の裏と表に及ぶ長文の書き入れである。

④・1

国友藤兵衛能当は江州国友村の住人にて、代々官の鉄炮鍛冶なり。此度此風炮を製し一時其名を振ふ。我と殊に入魂なり。

然るに近来常州岩間山の十二天狗の宗匠なる杉山僧正と称する大天狗の弟子に白石平馬と云ふ者あり。其元は江戸池の端七軒町の駕ごかき庄七と云ふ者の弟なり。此平馬九月中より親元え帰り、種々奇妙の技芸を得て江戸一般の大評判なり。

考察

「岩間山の十二天狗」 岩間山は筑波山地の北東部にある愛

宕山(標高三〇五m)をいう。十三天狗の伝説がある。『仙境異聞』中の寅吉の語りによれば、「岩間山に十三天狗、筑波山に三十六天狗、加波山に四十八天狗、日光山には数万の天狗といふなり。岩間山にはもと、十二天狗なりしが、四五十年前に、筑波山の麓の長楽寺の真言僧が釈迦如来に化け、十三天狗となったという。「岩間山の十二天狗」とした信淵の不注意は、天狗への関心の薄さを露呈しているようだ。

「我と殊に入魂なり」 信淵が山田大円を「我熟友」と呼んだと同様の誇張表現と思われる。この年(文政三年)一〇月一日に山田大円の紹介で篤胤に入門した一貫斎(四三歳)からすれば、信淵(四七歳か)は五年前の文化二二年(一八一五)に入門した兄弟子にあたる。「入魂」の間柄であれば、信淵から一貫斎宛の書状なり、一貫斎の信淵への言及なり、見つかつてもよさそうであるが、見当たらない。

「白石平馬」 『仙境異聞』によれば、寅吉は筑波山の社家白石丈之進に弟子入りして、神道を学び、白石平馬と名乗ることを許され、丈之進は文政三年三月にその名を記した通行手形を寅吉に与えた。その後、寅吉は岩間山「十三天狗」のうち「杉山組正」という天狗に入門した。(二〇～二二頁)

「池の端七軒町の駕ごかき庄七と云ふ者の弟なり」 『仙境異聞』では父の名前を出し、「江戸下谷七軒町なる、越中屋与惣次郎といひし者の二男」とするが、父の職業には触れな

い。また兄の名前は「庄七」ではなく、「庄吉」とする。すなわち、「父は今ヨリ三年さきに世を退れり。その後は寅吉が兄庄吉、ことし十八歳なるが、少しの商ひを為て、母と幼き弟妹などを養ひ、細き烟を立つるといふ」（一一頁）とある。一方、信淵はなぜか寅吉の父親にまったく触れず、兄の住所と職業（駕籠かき）のみを記す。

「九月中より親元え帰り」信淵の記憶違いであろう。『仙境異聞』では、九月七日から山崎美成宅に寄寓とする。

④・2

先づ書法を以て屋代太郎を伏し、幽冥の理を説て平田篤胤を伏し、音楽の妙を説て御音人衆を伏し、鉄炮の理を説て此国友をも伏し、風炮などは仙家に於ては種々の妙機ありて、此製の如きは甚だ籠工にて取るに足らざることの由なり。国友も天狗界の風炮制作の妙理を聞て、大に膽を潰し、此頃は右の白石平馬に従て其法を伝授し、又々仙家の風炮の製に取か、れり。定て来春は出来るなるべし。

考察

「書法を以て」「仙境異聞」に「童子が書、またその運筆をば屋代翁をはじめ書に賢き人々は皆驚き称する事なり」（二九頁）とある。

「幽冥の理」目に見えない世界（幽冥界）すなわち天狗界

に出入りして寅吉が知り得た事象全体をいう。

「御音人衆」未詳。歌舞音曲家をさすらしい。『仙境異聞』には対応する記述が見当たらない。

「大に膽を潰し」「仙境異聞」には篤胤と一貫斎が驚いた場面の記述がある。「風をこめて打つ鉄炮もありと云ひ出でたるに、我も人も此の頃国友子が風炮にいたく驚きをるに、此を聞きて更に驚きて顔見合せける中にも、国友能当は殊に甚（いた）く驚きぬ。これ己れと共に仙炮の事を問へる始めなり」（二八―二九頁）。

「其法ヲ伝授シ」文脈から「伝授シ」は「伝授サレ」の意味にちがいない。『仙境異聞』には、十月「五日に自作の風炮を持ち来たり、寅吉にその仕掛を見せて、神炮の事を探ぬるに、相発して悟り得る事甚だ多し」（四九頁）とある。

「仙家の風炮の製」一貫斎が寅吉伝授の製法に従って「仙家ノ風炮」制作を行ったとは、『仙境異聞』に記述がない。ただ、当時、篤胤が一貫斎に宛てた書状（三月二日付け、年不詳）に、篤胤が一貫斎から「仙炮凶色紙」を借り返却したこと、その追伸に紀伊国石井伝左衛門という人が「仙炮之事進メ候へバ貴家へ近々申遣候」と問い合わせてきた旨を述べている。

④・3

扱この白石兵馬と云ふは、本名は虎吉と云へり。七歳の時より天狗に誘はれ、当年十五歳にて親元に帰れり。其頑なること可惡の童子なり。然れども其諸物の理を發明することは実に聰明伶俐、遙に千万人の意外に出づ。奇人と云つべし。

考察

「当年十五歳」『仙境異聞』は「文化三年寅年十二月晦日の朝七ツ時に生れたるが、その年も日も刻も寅なりし故に、かく名づけしとぞ」（一頁）と「寅吉」の名の由来をのべる。信淵がここで「寅吉」ではなく「虎吉」としているのは、名前の由来を知らなかつた証左といえよう。

「頑なること可惡」『仙境異聞』に、篤胤が信淵から聞いた話として、文政三年一月二五日夜、広小路名主の宅で寅吉が居合わせた客の真言宗の学僧に論争をふっかけ、周りの制止を聞かずに、学僧を激しく罵り名主を困らせた様子を詳しく記している（六五〜六八頁）。

④・4

彼が製したる笛に種々の制ありて、其長一丈にして五十孔ある者あり。長九尺にて五十七孔ある笛あり。共に五人にて吹く。又一尺五寸にて九孔ある者あり。又ふいごの如くにて棒を抜さして鳴らす笛あり。又八絃の琴の如くにて、其弦

は真鍮の針金にて鉄の爪にて鳴らす物あり。又桶の中に水を蓄へ、其上に金鉢を伏せて打鳴らす者あり。何れも其声晴朗にして甚だ妙なる美音を作す。

仙家に七聖の舞は竜の舞等、種「々」の舞樂あり。此十五歳の童子よく其音律に通じ、且つ進退俯昂周旋して、其舞を作す。誠に絶代の奇事なり。

此童子の制也樂器は先月中既に悉く將軍家の御内覧に入り、諸侯も往々に其臣を遣してこれを学ばしむ。大久保加賀守などは別して熱心の由なり。

考察

「七聖の舞」七生の舞、七韶の舞とも表記される。天神地祇を喜ばせて感応を得たり、山の妖魔を祓い清めるための舞樂。ここで信淵は実際に七聖の舞を目撃したかに書いているが、『仙境異聞』によれば、寅吉はその舞に使用される琴の図を描いてみせたりするのみで、実演してはいない。また、篤胤は、七韶の舞や仙砲などの話は、妄想にすぎずない、伶俐な兒童が人から聞いたことを山人（天狗）から聞いたと言ふらしているだけだ、という荻野梅雨（梅塲）の説に対して、「梅塲氏の言甚く心得がたし」とする（五八頁）。

「彼が製したる笛に種々の制あり」ここで説明されている寅吉製作の種々の笛や樂器は、いずれも山田大円が所蔵していたオランダ渡りの種々の「オルゴオル」と似通っている。

『仙境記聞』には、文政三年年一月八日に、篤胤が小嶋惟良、屋代弘賢、寅吉を連れ立って山田大円宅へ出掛け、大円所蔵の「オルゴオル」を見学した模様が次のように、詳しく記されている。ただし、篤胤は参加者に佐藤信淵がいたとは書いていない。また、見学した際、寅吉は似た楽器は山にもある、と云ったとしているが、寅吉製作の楽器を將軍家内覽に供したり、諸侯の家臣に製作法を学ばせたなどという話は『仙境異聞』にはみえない。「大久保加賀守」は老中大久保忠真（一七八一〜一八三七）、相模小田原藩主である。

翌八日には、小嶋惟良ぬし、屋代翁、予と三人にて寅吉を伴ひて山田大円が行きぬ。然るは彼の人もかねて寅吉に逢はまほしき由を、小嶋主にいひ、殊に種々珍しき器ども持ちたれば、其をも見むとてなり。此の日山田氏に集へる人々十人余りなるべし。寅吉に書を乞へば、是れまで見ざる繩を結びたる如き字あまた、篆書の如き彼の界まがの字などを夥しく書きたり。種々の物を見るにつきて種々の物語りも出でける中に、阿蘭陀オランダより来たれるオルゴオルといふ楽器を見て、山にも見たる楽器にこれと似たるが有り」と云ひ出でたり。「此時の事（二）卷六十 五丁六十六丁にもあり」山田氏はそれはいかに製れる物ぞと探ぬれば、下に記せる鉄の箱に笛六本を仕掛け、水

をはりて貯金をまはせば、中なる水の湯となりて笛の鳴り出づる器の事を語り、此の因ちよみに鉄の器に水をもり、鉄棒にてかきまはせば湯のわく器の事を委しく出でたりき。（五二〜五三頁）

○屋代翁、小嶋氏、予と三人、寅吉を同道して、山田大円が行きけるに、あろじ淤蘭陀オランダより渡れる、オルゴオルと云ふ物を出して見せらる。其は図の如き笛はの中に、丸木にひしと針金を打ちたるを二本渡したり。外なる貯金を廻せば針金を打ちたる二本の丸木しり合ひて、カリ〜と鳴るを、それに連れて幾多の笛、ひやう〜と互ひに異なる音を出すべく拵へたる物なり。笛は底に有れど、音は誰が耳にも、いと上に聞こゆれば、笛はいづこに有らむと皆不審いふかしみけるに、寅吉ひとり笛は底に有るべしと云ふにぞ、大円子実に然りとて笛をかへして底を見せけるに、笛は底の外に十二本並べてぞ付きたりける。寅吉よく見て、我が山にも此の器に似たる物ありと云ふ故に、大円子そはいか様に製れる物ぞと問へば、寅吉云はく、「此処原本一頁空白」（一四七頁）

篤胤サロンで話題になった山田大円のオランダ渡りオルゴール・コレクションがどのようなものであったかはよく分からない。『続徳川実記』の文政五年二月一五日に「この日

入貢の蘭人御覧あり。をるごる付時計一種なり」とあるように、単独のオルゴールやストリートオルゴールよりはオルゴール時計が多かったように推測される。すこし時代がさかのぼるが、大槻玄沢サロンでの訳稿を集成した『蘭腕摘芳』には、司馬江漢所蔵の「司馬氏蔵 オルゴル貼紙訳艸」や「鐘樂臆説」（蘭腕摘芳二編卷之一、磐水先生訳考、寛政二二年一二月下旬成）がみえる。

④・5

今は此童子、我親類なる平田大角が宅に居す。官より命ありて謾に人に見せしむることを禁ず。予と大角として此天狗童に問聞せし仙家の法及び幽冥万物の理、既に七八冊に及べり。来春小生秋田に帰ることを得ば、諸図諸説悉く持参仕り、貴覧に入れ申すべし。実に有用の事も頗るまれあることに御座候。

辰十二月十日 佐藤松菴桃祐甫書

考察

このように、門人である信淵が師の篤胤（通称大角）のことを親類呼ばわりしたり、「予と大角として」などと同格の友人扱ひするのは、信淵の自己宣伝にすぎない。篤胤と共同して作成したという寅吉からの聞書集も、実態は篤胤の『仙境異聞』の写本であったかもしれない。「来春小生秋田に帰

る」計画が実現したか、不明。

おわりに

平田篤胤サロンの寵児となった寅吉がもたらした異界情報のうち、気砲およびオルゴールに関わるものは、一貫斎、山田大円が情報源であることは明らかである。目に見えない異界を探索した篤胤のサロンで、蘭学のもたらした科学知識と鉄砲鍛冶の技術の結合から生まれた気砲が話題となった。佐藤信淵の『気砲記』書き入れは、科学的な観察精神や批判精神からは程遠い自己宣伝的な気砲レポートであった。眼科医、蘭学者、奇巧家でもあった山田大円の科学知識がどのようなものであったか。稿をあらためて追求したい。

註

(1) 小川劍三郎（一九三二）「山田大円先生伝」中外医事新報一〇六七号、一〇一頁参照。

(2) 佐藤信淵の平田篤胤入門は、文化一二年（二八一五）。

平田篤胤門人の「誓詞帳」（国立歴史民族博物館蔵）に

「羽州秋田人 江戸住 佐藤百祐 後松庵 文化十二年

乙亥 藤原信淵」（「ヒロ」は朱字）と記す。また「授業

門人姓名録」(同館蔵)には「出羽国秋田産 江戸住
(日文) 佐藤百祐藤原信淵^{ヒト} 後松庵 玄海」(「玄海」は
朱字)とみえる。

(3) 二〇〇三年夏、オランダ・デルフトJgermuseum
(陸軍武器博物館)所蔵のスヘイフェル銃を調査した。
富井洋一・松田清(二〇〇三a)「一貫斎気砲と
『SCHEFFEL』空気銃」『江戸時代の科学技術——国友
一貫斎から広がる世界』市立長浜城歴史博物館、五五—
五六頁参照。

(4) 以上、国友一貫斎の伝記事項は有馬成甫(一九三二)
『一貫斎国友藤兵衛伝』武蔵野書院、による。

(5) 平田篤胤の「授業門人姓名録」(国立歴史民族博物館
所蔵)の文政三年欄に、「近江国坂田郡国友村 山田大
田紹介 国友藤兵衛 能当 十月十一日」、続けて「江
戸 屋代輪池翁紹介人 十四歳 高山寅吉 篤任 後
石井嘉津間 十月十一日」と記す。屋代輪池翁は屋代弘
賢。

(6) 前注参照。

(7) 以下の引用は『仙境異聞・勝五郎再生記聞』子安宣
邦校注、岩波文庫、二〇〇〇年、による。

(8) 松田清(二〇〇三b)「江戸時代舶載蘭書にみる空気
銃」『江戸時代の科学技術——国友一貫斎から広がる世

界』六一—六二頁、および同書四〇—四一頁。

(9) 前田一男「国民精神文化研究所の研究…戦時下教学
刷新における『精研』の役割・機能について」(『教育史
学』二五号、一九八二年)の「国民精神文化研究所職員
一覧」七六—七七頁による。

(10) 坂本稻太郎は東京帝国大学文学部教育学科卒業(卒
業年月日未詳)。教学錬成所錬成官をへて、戦後、羽後
交通(株)角館営業所長ののち、秋田大学学芸学部(昭
和二八年度—四一年年度)、秋田大学教育学部(昭和四
二年度—四八年度)の助教として教育学および教育史
を講じた。以上、秋田大学附属図書館・情報推進課利用
サービスにより『秋田大学職員録』『秋田県教職員録』
『秋田魁年鑑』記載事項の教示を得た。また、坂本稻太
郎は『秋田県教育史研究』(秋田大学秋田県教育史研究
会)創刊号(一九六四)の第七号(一九七二)の編者の
一人であった。

(11) 『佐藤信淵家学全集』中巻(岩波書店、一九二六)、
六二九頁。疋田家は久保田藩(秋田藩)の家老資格にお
いて、引渡一番、同二番に続く廻産に属する家格であつ
た。

(12) 森銃三(一九四二)『佐藤信淵——疑問の人物』(今
日の問題社、昭和一七年一〇月一五日程)、四頁。

- (13) 森銃三（二九四二）、七九〜八八頁。
- (14) 大島郁太郎「人・その思想と生涯（四〇） 深井史郎」
『あきた』八九号 一九六九年一〇月一日）五〇頁に昭和二年頃の石田直太郎の動静を記述する。石田直太郎は『秋田県史 文芸教学篇』（昭和三十六年三月刊）で「書道・漢詩」を執筆。
- (15) 森銃三（二九四二）、八六頁。
- (16) 森銃三（二九四二）、八七頁。
- (17) 『高島秋帆——西洋砲術家の生涯と徳丸原』（板橋区立郷土資料館、一九九四）所収、小林保男「徳丸本村名主（安井家）文書にみる徳丸原砲術訓練」参照。
- (18) 小川剣三郎（一九三二）による。
- (19) 有馬成甫（一九三二）、一六八頁。
- (20) 有馬成甫（一九三二）、一七五頁。以下の考察における、「気砲」第一号の記載は同書同頁による。
- (21) 松田清・富井洋一（二〇〇三c）「松浦静山旧蔵『風銃』およびデルフト軍事博物館所蔵スヘイフェル銃調査の中間報告」『近世日本における科学・技術の源流——ガリレオ、レーウエンフックから一貫斎まで』江戸のものづくり第3回国際シンポジウム実行委員会、七三〜七四頁。
- (22) 『日本歴史地名大系』東京都板橋区「徳丸原」項目。
- (23) 有馬成甫（一九三二）、三八六頁。